

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## チェレミス語とヴォチャーク語における引用小辞： ウラル諸語におけるチュルク的引用表現

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 庄司, 博史 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004387">https://doi.org/10.15021/00004387</a>

## チェレミス語とヴォチャーク語における引用小辞

——ウラル諸語におけるチュルク的引用表現——

庄 司 博 史\*

Quotation Particle in Cheremis and Votyak: Turkic-type  
Quotation in Uralic Languages

Hiroshi SHOJI

In Cheremis and Votyak it is possible to embed a quotation into an introductory sentence using the gerund form of the verb “to say” at the end of quotation. Verbs used as the predicate of these matrix sentences are not limited to those describing a verbal act, but they can also be those of thinking and even of perception or cognition. Thus this gerund form may be designated as a quotation particle, which corresponds to a complemental conjunction in Indo-European languages. When used in these expressions its original lexical meaning (LM) and syntactical function are no longer distinct. Because of a similar type of expression in the neighboring Turkic languages, *i.e.*, Chuvash and Tatar, this special use of the verb “to say” in these Uralic languages has been explained as a borrowing from Turkic. This paper explains the phenomena in terms of internal development without foreign influence.

The use of this element in its particle-like function can be classified into four types according to the predicate verb of the matrix sentence (PV).

1. The LM “to say” of the element may still be overt, when the PV is a communicative verb;
2. The LM is covertly recognizable, when the PV is a verb of thinking, which may be interpreted as an internal verbal act;
3. The LM is totally lost when the PV is a perceptive or cognitive verb. In these cases the element signals the boundary of the quotation and indicates the relation of it as a complement to the PV. The particle-like function grows as the LM vanishes;

\* 国立民族学博物館第3研究部

and

4. The element may, together with a quotation, form a clause indicating the reason or purpose of the action of the matrix sentence. Although the element here might appear far developed as a particle with the purely grammatical function of forming a final clause, the LM “to say” has not totally disappeared.

The particle-like functions found in the different uses seem to have developed on the basis of the inherent characteristics of these languages. The most decisive factors in the development of it are: 1. the SOV basic word order, which determines the principal location of a quotation in a sentence and the need of a post-quotation particle; 2. the existence of the verb “to say” which itself can follow a quotation immediately; and 3. the existence of a multifunctional gerund, which can indicate both coordinative and subordinative relations of the action of a stem verb to that of a principle verb.

As we see in some languages unconnected with either of the groups mentioned above, the same kind of particle may develop from the verb “to say” when provided with these conditions.

I. はじめに	1. 語彙の意味
II. 引用の小辞の統辞的動機づけ	2. 文法的機能
III. 基本伝達動詞定活用形の引用表現における小辞的用法	3. 形態
IV. 基本伝達動詞動副詞形の引用表現における小辞的用法	V. 小辞化の過程
	VI. 結論

構文を簡略化して示すため次の略号を用いる。なお、引用構文に關与的でない付加句は省略する。また例文において引用部は原典のまま、〈...〉, “...”, >...>などで示されているが、原典にこのような標示がない場合は [...] で示した。さらに原典の依拠する方言や表記法により同じ語がいくぶん異なる形で表わされている場合がある。例文では、「言う」にあたる動詞は二重下線で示し、他の引用動詞と区別した。

Q (quotation)	引用部
V (erb)	引用部を受ける導入部 (主文) の述語動詞 (引用動詞)
v (erb)	「言う」に相当する基本伝達動詞
f (inite form)	定活用形
g (erund)	副動詞形
S (ubject)	主語
q (quotation marker)	引用の小辞一般

## I. はじめに

ウラル語族に属するチェレミス語 Cheremis (マリ語 Mari) やヴォチャーク語 Votyak (ウドムルト語 Udmurt)<sup>1)</sup> においては引用表現<sup>2)</sup> として次のような例がある。

### a. (S) Q v-g V-f

Cher(emis). «Ilen-tolôn kommunôšto ilaş tüğalôna» manôn (Roman)  
gradually we will live in a commune. say-g.

kalasôlôn. [ISANBAEV 1961: 89]  
mention-f.

「だんだん私たちはコミュニンで暮すことになるでしょう」と(ロマンは)言った。

Voty(ak). “ben oktodj-ua?” šuiša d’uam. [WICHMANN 1901: 82]  
then do you carry it away? say-g. asked-f.

「それじゃそれをもっていくのですか」と彼は尋ねた。

### b. S V-f Q v-g

Cher. jer oza ... βara marilan kalasen: “mari, βaške βolô, tš  
lake master then to Cheremis mention-f. Cheremis, come down soon, a  
jer βaške toleš” manôn. [ALHONIEMI and SAARIMEN 1983: 56]  
lake comes out soon say-g.

湖の主はそこでチェレミスに言った「チェレミスよ、すぐに降りてこい。湖がすぐに出て来るぞ」と。

1) チェレミス語はモルドヴィン語 Mordvin とともにボルガ Volga 系に属し、主に Vetluga 川と Vyatka 川に挟まれたボルガ川北岸流域に話される。またバシキール共和国にも一部話される。チェレミス語は9世紀から13世紀にかけチュルク系のヴォルガブルガル (古代チュバッシュ), その後16世紀まではタタール語の影響をうけた。またロシア語との接触も14世紀以降次第に増加した。チュバッシュ語やタタール語 Tatar などチュルク諸語による影響は語彙のみでなく、構造面にもおよんでおり、チェレミス語にみられるいくつかの類型的特点がウラル祖語からのものか疑問視する学者も存在する [COMRIE 1981: 102]。

ヴォチャーク語はジリエーン語 Ziryene (コミ語 Komi) とともにペルミ Permi 系に属する。話される地域は主に Vyatka 川と Kama 川下流地域および Kama 川の南部・東部である。8世紀にジリエーン語から分れたのち、チェレミス同様、13世紀までチュルク系のボルガブルガールの影響をうけ、また13世紀以降、特に Kama 川下流域からその南部に住むヴォチャークは強いタタール語の影響下にあった。チェレミス語、ヴォチャーク語を含めたウラル諸語の類型的特点については庄司 [1983: 433-436] で概観した。

2) ここでいう引用とは、直接引用や間接引用などにかかわらず、またそれが実際の発言内容であるかどうかにかかわらず、文としての陳述度を保ったまま目的語句として他の文に組み込まれているものを指す。したがって、引用部の動詞が定活用をとらず名詞化されたものなどは引用表現には含まない。あとでみるように、本稿では、これらは意味的には、伝達動詞の他、知覚動詞、思考動詞などの目的語となる場合もある。したがって「引用」という用語は厳密な意味では不適當かも知れぬが、問題とする表現が引用表現から発達してきたと考えられるため、この用語を用いておく。また伝達動詞、知覚動詞、思考動詞など引用部を意味的に目的語としている動詞を引用動詞と呼ぶことにする。

Voty. so·berε njuu uromezliš d'uam: “u'uo ton d'eti'd-a?” šuijsa  
 then girl from her friend ask-f. maybe you touched? say-g.

[WICHMANN 1901: 74]

そこで娘は尋ねた「きっとあなたは触れたでしょう」と。

二種類の構文において引用部 Q のすぐ後におかれ、二重下線を引いた部分は、「言う」という意味をもつチェレミス語 *manam*、ヴォチャーク語 *šuiñi* (*šuiñi*, *šuni*) の動詞の動副詞<sup>3)</sup>の形態をとっている。しかし、上の例において、これらの要素は本来の意味と機能を果しているとは考えにくい。つまり、動詞の「言う」という意味や、活用パラダイムの一つである動副詞の果す機能を超越し、いわば「引用の小辞」ともみなすべき文法素の機能を持っていると考えられる [ISANBAEV 1961: 94; MAJTINSKAJA 1982: 85; SCHLACHTER 1973: 208]。なぜなら例のような引用表現において、意味上、引用部を実際の引用行為の対象としていると考えられるのは、これら「言う」動詞の動副詞形ではなく、導入部の述語動詞といえるからである。動副詞形の「言う」動詞は引用表現の中で意味的には関与せず、日本語の引用の格助詞「と」に近い役割を果していると考えられる。

このような例は他のウラル系諸語には見られない。しかし、周囲のチュルク系のチュバッシュ語やタタール語には非常に類似した表現が見られる<sup>4)</sup>。これらの言語は、他の点でチェレミス語やヴォチャーク語に多くの影響を与えており、この引用表現の場合の類似性も、ほとんどの学者により、単なる借用ということですませられてきて

3) それぞれ動詞の語幹に -ən (ən), -sa を接続する。動副詞形とは動詞の名詞形 *nominal form* あるいは不定形 *non-finite form* の一種である。動詞の名詞形は一般に、不定詞、分詞、動副詞の三つに分けられる。このうち動副詞形は文の中で副詞的機能をもつものである。この名称として、*gerund*, *verbaladverb*, *converb* などが用いられる。ウラル諸語やアルタイ系といわれる諸語にはこれら動詞の名詞形が豊富で、印欧語などにおける従属節、関係節などの副文にあたるものが、動詞の名詞形を核とする句により表現される場合が多い [FUCHS 1937: 318-319, FOKOS-FUCHS 1962: 106, ITKONEN 1966: 327]。

4) 次のチュバッシュの例において文末の *teze* は *te-*「言う」の動副詞形である。  
 Chuvash *paiša xiri* > *an vi'er* > *teze jălänñe*. [KARAHKA-RÄSÄNEN 1949: 136]  
 emperor daughter don't kill. say-g. implor-f.  
 王女は「殺さないで」と嘆願した。  
 Chuvash *jeñbileñže kalanä*: > *jurö, at'ë, it'ycp, ezö ästa panä unda kajöp* >  
 say-f. good, father, I'am obedient. I will go wherever you give me to.  
*teze*. [KARAHKA-RÄSÄNEN 1949: 272]  
 say-g.  
*jeñbileñže* は言った。「いいでしょう、お父さん、私はあなたのやるところへ行  
 きましょう。」

5) 借用とする説は [SEREBRENNIKOV 1963: 377, MAJTINSKAJA 1982: 87, VASIKOVA 1982: 480-481] などであるが動副詞ごと影響をうけているという説もある [BEKE 1914/15: 68]。ただし *Vasikova* は、チュルク語の影響下において、直接引用表現に「言う」という動詞の動副詞形を用いる用法がチェレミスに入ったとしながらも、あとでみるような、様々の用法は内的発達としての可能性も示している。

いる<sup>5)</sup>。しかし、言語は一般にそれぞれ固有の構造をもち、他の言語と接触した場合でも、構造的な制約により簡単には影響を受けにくい。そして影響を受けた場合には、受け入れ言語の方に何らかの内的要因や条件が存在していると考えられるケースが多い。したがって、言語のある現象の発達について論ずる際、まず重要なのは、それが当該言語の内的な発達として説明しうるかどうか十分検討することである。同様のことがチェレミス語やヴォチャーク語の引用表現についてもいえる。この観点から、本稿の目的は、この引用表現が、これらの言語の内的な発達として説明が可能かどうか、そして、外部の影響を想定する場合には、如何なる内的な要因あるいは条件が存在していたかについて考察することにある。

これは、二つの観点から行ないうる。まず第一に、なぜ引用部に後置される要素が必要であるか。実際ウラル系の多くのことばでは、周囲の印欧語のように、引用の導入部と引用部を接続詞を用いずに並べる構文、つまり並置だけにより二つの文の関係を示す初原的な表現が存在する [ITKONEN 1966: 325-327]。このような並置による表現と、ここで扱おうとする引用表現との関係はどういうものか。

第二に、なぜ引用部に後置される要素に「言う」に相当する動詞の動副詞が用いられるかということである。

まず、このように引用部に直接後置される要素を仮に「引用の小辞」<sup>6)</sup>と呼ぶことにして、次の章(第二章)では、その存在、あるいは出現がどのように動機づけられるかを考察する。さらに問題の「言う」の意味をもつ動詞の動副詞形がどのような理由で引用の小辞というべき機能をもつか(第三、第四章)、そしてその機能はいかなる過程を経て獲得されたのか(第五章)について述べる。もし、その過程が言語の内的発達の結果であることが説明し得れば、必ずしも外部から、つまり異言語からの影響あるいは借用を想定する必要もないことになる。

6) ここで、論を進める上で必要な概念である小辞 particle についてその基本的性質を明らかにしておきたい。小辞の条件はその文法的意味、あるいは機能にある。一般にいう語のもつ意味には、言語外の事物をさす語彙的(辞書的)意味と、文として線的に配列された語と語の統語的關係を示す文法的意味の2種類がある。このような統語的關係は、たとえば次の文の前置詞 to により示される関係にみられる。

I gave a book to him.

この to は him が間接目的語であるということを示す。この to が文法的意味しか持たぬことは次のように、語順により、文法関係を標示しようとする際には、必要ではなく、語彙的意味をもたないことからわかる。

I gave him a book.

小辞のもう一つの重要な点は、それが、名詞や動詞と異なり語形変化を行わず、固定された形をもっていることにある。

## Ⅱ. 引用の小辞の統辞的動機づけ

引用の小辞が内的発達の結果であるという仮説を立てる場合、そのような機能をもつ要素の必要性が説明できれば、この仮説が強化されることになる。したがって、ここでは、言語の一般の性質という面から、引用の小辞について考察したい。

先にも述べたように、これら言語には導入部と引用部を単に並置するだけの引用表現がある。S V-f Q ~ Q S V-f ~ Q V-f S

Cher. mari kalasa: “mâj kontâšm kum βozâm, kuštâ tušâ?”  
Cheremis mention-f. I brought three women, where are they?

[ALHONIEMI and SAARINEN 1983: 30]

男は言った。「わたしは3人の女をつれて来た。彼女たちはどこだ。」

Voty. peri...ađ'amiqreš d'uam: “ađ'ami urom, ton öd kut ama?”  
devil from man ask-f. my friend man, haven't you got anything?

[WICHMANN 1901: 62]

悪魔は男に尋ねた「するとおまえは何も手に入れなかったのか」

この表現において、導入部 S V-f と引用部 Q はそれぞれ独立し、引用部の統辞機能を標示する要素は欠けている。導入部の述語動詞<sup>7)</sup>としては、「言う」などのように積極的に言語による発話行為を表わし、補語としての引用部あるいは語の存在を示唆する動詞、「しゃべる」、「語る」などのように発話行為の様式に重点をおく動詞、「思う」、「考える」などのように実際には発話行為を伴わない動詞、「悲しむ」、「笑う」のように感情行為に伴う発言や思考内容を引用として伴いうる動詞などがある<sup>8)</sup>。

導入部と引用部という関係にある二文の間には、統辞的關係を標示する要素が存在しないため、二文間の論理的關係の解釈は文脈に依存するといえる。さらに引用部が導入部と統辞的に区別されぬため、導入部のレベルへまぎれ込むおそれがある。

したがって、もし、このような二文の間を關係を文脈によらず明示し、さらに導入部と引用部を区別しようとすれば、何らかの統辞的手段によらねばならないことにな

7) 引用部をうける動詞を便宜上、伝達動詞、思考動詞、感覚動詞、感情動詞などと呼ぶが、これらの名称は、おもにこれら動詞の意味によるもので、それぞれの動詞がもつ統辞上の素性(自動詞・他動詞の区別、補語として文、名詞、動詞の名詞形をとるか、など)によるものではない。たとえ同様の意味をもつ動詞でも言語により統辞的素性は異なることがあるため、ここではその観点から引用部とのかかわりを論じることができないが、これは今後の課題である。ただし、「言う」という意味をもち、最も基本的な発話行為を示す動詞は、ほとんどの言語にあり、後述するように統辞的にも特殊な性質をもつため「基本伝達動詞」と呼ぶことにする。この動詞は一般に *verba dico* と呼ばれる他動詞で、どの言語でも他の伝達動詞とは区別しているようである。例えば英語の *say*、独語の *sagen* など。

る<sup>9)</sup>。引用部は統辞的には補文であるが、この機能の標示には、一般に語順か何らかの文法的標識による手段があり得る<sup>10)</sup>。この実現に重要な影響をもつのが、言語それぞれがもつ基本語順である。基本語順により、導入部の述語動詞にとって補文である引用部の位置が決定されるからである。したがって、補語(目的語)が動詞に先行する SOV の基本語順<sup>11)</sup>をもつ言語においては、引用部 Q が述語動詞 V の前に来る S Q V が自然な語順となる。逆に SVO の言語では S V Q が想定される。

さて、実際の言語で、このような語順のタイプごとに、補文の機能を標示する要素 (quotation marker=q) がどこにあらわれているかをみると、非常に一般的な傾向として、SOV 語では、Q と導入部述語動詞 V との間で、S Q-q V となり、SVO 語では、述語と引用部の間で、S V q-Q となる。

SVO の言語として英語を例にとってみると、このような補文標示素としては、接続詞 that が用いられる。次の例にもあるように、それは導入部と引用部の間に置かれる<sup>12)</sup>。同様のことは SVO の語順をもつ多くの言語においてもいえる。

8) 最後のような例は日本語の場合、三上により見せかけの引用動詞と呼ばれる [三上 1972: 143]。

うまく行ったわいと たいへん得意だった。

同様の例をチェレミス語で示す。

Cher. [Možo jōra?]-Pötär öreš. [SOVREMENNYI 1961: 134]

what is good? Pötär wondered

「何が一体いいんだ」と Pötär は不思議に思った。

フィンランド語にも同様の例があり、Siro [SIRO 1964: 117] は導入部と引用部の関係は緩いとし、導入部の動詞には種々のものが現われうるとしている。

[Sen nyt arvaa], hymyili Veija Kataja.

'That's what one guesses' smiled Veija Kataja

「そんなことだろうと思った」ヴェイヤカタヤはほほえんだ。

このような二文の並置により、種々の論理関係の表現をゆだねる初原的な構文は、ウラル系諸語以外、印欧諸語などにも広く見られるものである [LEHMANN 1974: 159, パウル 1976: 258-9]。

- 9) Lehmann [LEHMANN 1974: 54] は印欧語におけるこのような小辞の機能として、文の境界を定めることと節を導入することをあげている。
- 10) 導入部と引用部との境界の明示の方法は、アクセント、ポーズ、抑揚など韻律的な手段によりある程度補うことも、可能である [ITKONEN 1966: 325]。
- 11) ウラル諸語の基本語順に関して諸説がある。ウラル祖語では修飾語が被修飾語に先行する Rectum vor Regens の原則があり、主語や目的語は述語動詞に先行したという説がもっとも一般に認められている [RAVILA 1941: 40, FOKOS-FUCHS 1962: 112-116]。但し Comrie [COMRIE 1981: 93] はそれが厳密なものであったかについては疑問的な立場をとっている。一般に現在のウラル諸語のうちウラル以東の諸語は、古い SOV の語順を保つのに対し、西の諸語は印欧語の影響で、より自由な傾向に向いつつある [TAULI 1966: 78, COMRIE 1981: 92] とされるが、西の言語であるチェレミス語とヴォチャーク語は SOV の語順をもつ。
- 12) 英語の規範文法では、このように補文標示として接続詞 that や if を用いるものは間接話法とし、一方発話をそのままの形で引用する直接引用の場合には、補文標示を用いないということになっている。しかし、実際の使用においては、直接話法にも that が表われることがあり、逆に引用内容は間接話法の形態をとっている場合もあり、直接・間接話法の構文上の違いは本質的なものではないと考えられる。

He says that he is innocent.

q Q

また SOV の言語の例として日本語の場合、格助詞「と」が引用の小辞の機能を果たしているが、これは引用部に後置される。

彼は自分は無実だと 言っている。

Q q

これと同じ形態は、系統としては英語と同じ印欧語に属しながら、SOV の基本語順をもつ古代インドのヴェーダ語にも見られる。補文標示の *īti* は引用部のあとにおかれている。

īndur īndrāya pavata īti dēvāsō abruvan.<sup>13)</sup>

the liquid becomes purified for Indra q the God said

[BRUGMANN 1916: 980]

「液体はインドラのために清められる」と神々が語った。

Q q

以上のような現象は、言語の系統や地域を超えて、かなり普遍性をもっていると思える。また、基本語順は、その他の文構成要素間の語順（名詞—形容詞、副詞—動詞、前・後置詞—名詞など）との間にも相関関係があるため、これら諸要素間の語順に関しては、さらに高次で普遍的な法則性があることが予想される<sup>14)</sup>。また一方では、基本語順と接続詞の位置との関係を、聞き手が発話を聞き理解するうえで心理的に負担の少ない構文を選ぶという言語心理学的観点から説明しようとする説もある。たとえば久野 [KUNO 1974: 123–127] は、接続詞は補文の境界を標示するもので、これの置かれる位置により理解度が異なるとし、各言語固有の基本語順に従い、接続詞の位置が決定されると説明する。そして、この説によれば、やはり SOV の言語では接続詞は節末に、SVO では節頭に来る場合が、発話を理解するうえでもっとも心理負担が少ないという言語心理学的な根拠を与えられている。

以上の考察により、一般に言語は、引用部と導入部を一つのまとまった文として表現しようとする場合、引用の小辞として、何らかの要素を引用部につける。そして、この要素の引用部に対する位置は、各言語のもつ基本語順と相関関係にあると推測されるが、一般的な傾向として SOV の基本語順をもつ言語では、引用の小辞を引用部のすぐ後に置くことが明らかになった。

13) *īti* は本来「そのように」という意味の副詞である。

14) V と O の語順と他の要素間の語順との相関に関して、統計的な試みを最初に行ったのはグリーンバーク [GREENBERG 1963] であるが、より抽象的な法則を発見しようとした試みに [BARTSCH & VENNEMANN 1972] がある。

### Ⅲ. 基本伝達動詞定活用形の引用表現における小辞的用法

ここでは「言う」という意味を持つ基本伝達動詞について考察するが、それに先立って、この基本伝達動詞の動副詞形ではなく、定活用形を用いた次のような表現に注目したい。

**Cher.** əðəržə kelesä: “prānik uke”, maneš. [BEKE 1951: 48]  
 girl mention-f. it is not a honeycake. say-f.

娘は言う「蜜菓子じゃない」と。

**Voty.** ad’ami juan: “ton kɨ’t’šɨ vetlid?” šuem. [WICHMANN 1901:  
 man ask-f. where have you traveled? say-f.

104]

男は尋ねた「おまえはどこを旅していたのか」と。

この構文は、S V-f Q v-f によって表わすことができる。これは、冒頭にあげた、基本伝達動詞の動副詞形を用いた二種類の構文のうちの b のタイプ (S)V-f Q v-g と類似しており、異なるのは、引用部のあとに来る基本伝達動詞が定活用形をとっている点である。ほとんどの場合、引用表現の事実上の発話行為の具体的な形態を示す動詞は引用部に先行する導入部の述語動詞であり、引用部のあとにおかれるのは「言う」にあたる基本伝達動詞である。

注目すべきは、このような表現において、基本伝達動詞の語彙的意味の果す役割は非常に小さいと考えられることである。上に示した例では、導入部の引用動詞の語彙的意味は「言う」という行為を内包しているし、次の例のような場合では引用動詞が知覚動詞や思考動詞や感情動詞で、これらには「言う」という実際の発話行為は逆に伴わない。

**Cher.** Kokša šonalten, [βet tiðə meŋkə-šaməč kəlmat] maneš.  
 think-f. these piles will be certainly frozen. say-f.

[ALHONIEMI and SAARINEN 1983: 84]

Kokša は思った。「きっとこの杭は凍ってしまうだろう。」と。

**Voty.** anajez šiikiz ad’d’zem no tokmam: “aj, niɟumε šiisko viɟum!”  
 mother eating saw and think-f. Oh, I have eaten my daughter.

šuem. [WICHMAAN 1901: 66]  
 say-f.

母親は食べながら思った。「ああ、娘を食べてしまった。」と。

それでは、引用部に後置される動詞はここではどのような機能を果しているのか。

筆者は、これの機能はある意味で引用の小辞に相当するものと考える。

ここで先にあげた S V-f Q の引用表現と対比させてみる。この引用部を導入部に並置する初原的ともいえる引用表現では、先にも述べたとおり、統辞的關係を標示する要素が欠けており、解釈は文脈に依存する。これに対して、S V-f Q v-f の場合には次のことが言えよう。すなわち、S V-f Q におけるような二つの部分の間の不明瞭な関係がある程度明確化されている。まず引用部 Q のあとに基本伝達動詞が続くことにより、引用であることが示され、導入部 S V-f と引用部 Q v-f との論理的結合が示唆されることになる。また引用部 Q のあとに v-f が来ることにより引用部 Q の終りの境界が示され、引用者の発話（地の文）に混り込むおそれが少なくなる。さらに Q のあとの基本伝達動詞が定活用形であるため、動詞後置型 (SOV) であるこれらの言語にとって、引用表現全体としてはより安定した構文であるといえる。しかし、意味的に関与度の少ない「言う」という動詞が用いられるのはなぜか。

ここで冒頭の引用表現の a のタイプに立ち戻ってみると、それらでは、引用部と定活用形の引用動詞のあいだには基本伝達動詞の動副詞形が引用の小辞として介在していた。しかし、引用動詞として、基本伝達動詞が引用部に後置される場合には、そのような引用の小辞に当る特別な要素は存在しない。これは、チェレミス語やヴォチャーク語における基本伝達動詞がもつ統辞的な特徴によるもので、この種の動詞だけはいかなる小辞の介在も必要とせずに引用部を補語とすることができると考えられる。つまりチェレミス語の *man-* とヴォチャーク語の *sui-* という動詞は、引用部の文としての陳述度を保ったまま（つまり名詞化せずに）、それに後置できる。

Cher. mari: “pueđá· x̄n, jörà: m̄·j̄ nužđa· ula·m,” maneš.  
man if you give, that's good. I am poor. say-f.

[BEKE 1951: 136]

男は「もし何かくださるならありがたい。わたしは貧乏です」と言った。

Voty. ađ'ami “ta m̄nam anaĵem̄en turim-viž̄i kukišan̄ez” šuem  
man this is a hoe, by which my mother hacked up the grassroot. say-f.

[WICHMANN 1901: 53]

男は「これは私の母が草の根を掘りおこしたくわです」と言った。

これはきわめて特異な性質で、S V-f Q v-f において、Q のあとの v-f が単独で引用部に後置される理由が説明される。ところでこの構文は二つの定活用形の動詞を含むが、この引用表現は、S V-f と Q v-f という二つの文による分析的な表現から発達したためと考えられる<sup>15)</sup>。導入部の述語動詞である引用動詞に加え、引用部の

あとにも、引用動詞として基本伝達動詞が用いられたのは、本来主に発話行為であった引用表現において、実際に伴って現われる具体的な「言う」行為が重視されたためであろう。こうして、引用部に先行する導入部の引用動詞が引用行為の意味を担い、引用部のあとの基本伝達動詞は次第に本来の語彙の意味は認識されなくなり、統辞的要素として、小辞へ移行していったと考えられる。

したがって以上のことが可能になったのは、次の二つの条件が満されたためである。第一に、基本伝達動詞が本来「言う」という非常に広い意味領域をもち、実際の発話行為から思考など抽象的な行為の表現とも結びつくことができたこと。第二に、何の文法要素も介さず補文として引用部をとり得たことである。つまり、これらの言語の基本伝達動詞は定活用形でも、引用表現においては、引用の小辞に近い機能を内包しているといえる。

しかし、小辞であるためには原則として、語形変化は許されない。したがって、この場合のように基本伝達動詞が定活用を行う場合は完全な小辞とはいえない<sup>15)</sup>。定活用をすることによる限界はそれ以外にも二点あげることができる。

先(注6)にも述べたとおり、小辞には文法的意味が重視され、語幹の本来もつ語彙的意味、ここでは「言う」、が顕在化してはならない。しかし、主語の人称・数範疇と呼応し定活用することにより、主語との関係が明らかになり、常に動詞の語幹のもつ語彙的意味は現実には引きもどされてしまう。言語によっては、定活用形が短縮したり、他の要素と融合することにより、定活用のパラダイムからはみ出てしまったものもある。そういう場合を除き、語彙的意味を抽象化しきることには限界があるといえる。

もう一点は、定活用であるため、その位置が文末に固定され、したがって、S V-f Q v-fの構文以外には現われえないということである。もし、v-fが引用境界標識として純粋な小辞の機能をもっていれば、Q v-fは、導入部の述語動詞の補語を形成するはずで、これらの言語の基本語順SOVに従い、S Q v-f V-fとして現われ得るは

15) このようにS V-fとQ v-fのように分析的に引用表現を行う例はいくつか見られる。次はウラル語族オビウゴル系のヴォゲール語の例であるが、引用部の前に「尋ねる」の意をもつ動詞、後に「言う」の意をもつ動詞の定活用形がきている。

Vogul *βišyóm pärikätilyti:»näsər βeip pěstän?»* läβi. [LIHMOLA 1951: 6]  
 littleman ask-f. How is an old sinew? say-f.

小さい男は尋ねた。「古い弦はどんなですか」と。

16) 例えば次のチェレミス語の例では、文末の基本伝達動詞も、導入部の動詞と同じく定形活用により、第二過去活用三人称複数形をとっている。

tonäm *popənət:* „tiðə tamaḡańm βes mälodje,tsəm pörta?” *manōnät* [BEKE 1951:  
 then speak-pret.-3.pl. 'now she brought another fellow' say-pret.3.pl.

215]

そこで彼らは言った「今度は彼女、別の若造をつれこんだな」と。

ずであるが、このような構文は見ることができない。

以上のように基本伝達動詞の定活用形 v-f は、補文境界の標識という点で引用の小辞となるには限界がある。しかし、この定活用形は一方では、引用の法 modal と呼べる法的あるいは陳述緩和的 epistemic なニュアンスをテキストに与える要素として発達している場合がある。

Cher. Laška-pà·târ kalašà: ‘‘kot’š mu-ña·rê šì·žžò, maneš,  
 hero-noodle say-f. however angry he may be, say-f.  
 mì·nô tù·ðòm pušta·m.’’ [BEKE 1951: 322]  
 I will kill him.

英雄のうどんは言った。「彼がどんなに恐ってしようと、ほくは彼を殺してやるんだ」

上のような例では、v-f である maneš は単に Q のあとだけにかぎらず、Q の途中に、現われている<sup>17)</sup>。つまり引用文に挿入された文副詞のようなものといえる。これと同様のことは、他の言語においても見られることで、本来統辞的に上部にある主節（この場合は引用部を補文とする動詞）が補文の間に挿入されることにより、本来統辞的に下位にある補文との関係を逆転し、補文が主節となり、挿入節がその一構成要素となってしまうことと類似している。つまり、この場合、日本語なら「～と言った」より「～という（ことだ）」のように、引用されている内容が他人の発言であるとか、他人からの伝聞であるということを示すだけの標識となっているといえることができる [LEWY 1922: 76]<sup>18)</sup>。これが挿入される理由としては、やはり、Q が話し

17) このような引用の法の副詞あるいは上に示した引用の小辞のような機能を果している要素として、ヴォチャーク語の pe (pä), ジリエーンの pe がある [FOKOS-FUCHS 1959: 752, WICHMANN 1954: 92]。この要素は、引用の小辞のように Q と引用動詞の間にたつ場合、Q のあとに単独でたち全く引用動詞が用いられない場合、そして Q の間に置かれる場合がある他、強意として用いられている場合もある。ヴォチャーク語の例を示す。

Voty. Sô-berä mumiz vera ini: »mün al’i, nîlj, gidä potsa, so kîtkon valmâz šì »  
 then mother said, now go, my daughter, go to the stable, eat our drought horse.  
pä šuyä. [MUNKACSI 1952: 85]  
 said

そこで母親は言った。「行きなさい娘よ。馬小屋へ行って、私たちの馬を食べなさい。」

18) H. Paul は、直接話法における主文（導入部）が後置されるか挿入されることにより、従属化する傾向のあることを述べている [PAUL 1976: 259]。

Er ist, glaube ich, ein Lügner.

において、glaube ich は wie ich glaube のような文副詞の意味をもつことになる。英語などにみられる、I think, they say, などが文に挿入される場合もこれに当る。

例 He is, I think, quite trustworthy.

これら挿入句は主節とはみられず、むしろ副詞句とみなされる。同様の例は、他の動詞 believe, suppose などにもみられるが、引用表現と異なり、一般的な叙述に伴う真実性に関する主張をよわらげている [NOONAN 1985: 86]。

Radical syndicalism is, I believe, the best form of government.

手の発話の導入部にまぎれ込むのをくいとめ、また話し手にとって、長い引用を行う際それにより生じる記憶量の負担を軽減しようとするメカニズムが働いているためだと考えうる。

この極端な例として、次のように Q を構成するほとんどの文に v-f が含まれる場合がある。この段階では、ほぼ完全な引用の法あるいは伝聞の法の副詞に近い。次の例では *šuem* の語彙的意味はほとんど重要でなく、それが挿入されている文が引用であることを示しているだけである。

Voty.     *peri ad'amičij veram*: “oïdo, at'šjimes pužej kutomi”, *šuem*,  
           devil to man say-f.     come we together will catch reindeer,     say-f.  
           “ton ta šuresti mjin” *šuem*, “mon ta šwresti mjno” *šuem* no  
                                   you go that way     say-f.     I go this way     say-f. and  
           *oži koškil'l'am* [WICHMANN 1901: 62]  
                                   thus went

悪魔は言った。「来い。一緒にとなかいをつかまえよう。おまえは向うへ行け、わしはこっちへ行く。」そして彼らは行った。

補文の境界を示し、また補文の主文への関係を示す要素としての引用の小辞の用法とならんで、ここでみたような法的副詞とも呼べる用法も一種の引用表現とみることができ<sup>19)</sup>。次に示すのは、「私は聞いた」「彼は言った」のように、導入文としてとのった形を備えず、3人称活用の v-f のみが文に付加される例である。

Cher.     *jù m'âstê šũđâr t'šũ-t'škâđđ xiń, lu-m lije-š, mà-nât* [BEKE 1951:  
                                   when stars are dense in the sky, it begins to snow say-f.  
           426]

星がたくさんあるときは雪になるそう。

Voty.     *dirtij užaš murtlân užez il'ik-sil'ik luoz, šuo.* [FUCHS 1952: 248]  
                                   the work of busy man is unreliable     say-f.

19) これが文末に来た場合、日本語の「～って」に比較することができよう。

彼は無罪だって。

日本語において、文末に置かれる「って」は文の内容に関する話者の態度を示す「よ」「わ」「さ」などと同じく終助詞として扱われている【国立国語研究所(編) 1951: 72】。それでも「って」の場合は文の内容が伝聞あるいは引用であるという法的意味が加わっている。このような引用・伝聞の法的意味は多くの言語により種々の表現法が発達させられており、副詞、挿入句あるいは文末小辞などにより標示されるだけではなく、言語によっては動詞の法活用のパラダイムにとり入れ、引用部の述語動詞の定活用において示す場合がある。たとえば印欧語の間接話法において、それが主文に対してもつ従属性は接続法により示されている【パウロ 1976: 261】。次の文の接続法形 *könne* は直接法では *kann* となる。導入部が省かれた場合には接続法形が伝聞であることを示す。

*Er meint, er könne dich betrügen.*

このような伝聞・引用の法的意味の表現については Haarmann [HAARMANN 1970] の研究がある。

急ぐ人の仕事は頼りにならんと。

#### Ⅳ．基本伝達動詞動副詞形の引用表現における小辞的用法

ⅢI では、基本伝達動詞は定活用形でもある程度小辞的役割を果しうることをみた。ここから、本稿の論点である動副詞形の検討に進むが、この章では、基本伝達動詞の動副詞形が実際にはどのように引用の小辞として機能しているのか、引用表現として現われる用法をいくつかに分類して考察することにする。

##### 1. 語彙的意味

先ですでに述べたとおり、これが純粋な小辞であるためには動詞語幹がもつ語彙的意味から解放され、より抽象的な文法的意味をもつことがもとより重要な条件となる。それには、一方ではできるだけ「言う」という意味が除去されていることであり、一方では引用標示の機能を備えていることである。次に、引用表現のタイプごとに、語彙的意味「言う」がどの程度引用表現に関与しているかを見ていくことにする。

ここでもう一度冒頭にあげた例にもどることにする<sup>20)</sup>。S V-f Q v-g をとってみると、Q の前に来る定活用形の引用動詞は一般に、「言う」「尋ねる」「命ずる」など具体的な発話行為をともなう動詞である場合が多い。これらを第1のグループとすると、「言う」に相当する動詞が、これら第1グループに属する動詞と一緒に、一つの引用表現に現われても意味上の矛盾はない。例えば引用動詞として「尋ねる」が用いられている場合をとり、これと「言う」という動詞の意味的關係を図式化すると次のようになる。「言う」という基本伝達動詞の中心的語彙的意味成分である発話行為は、引用動詞に内包されている。

尋ねる [……, +発話行為, ……]  
           ||  
 言う           [+発話行為]

したがって、この構文において基本伝達動詞の語彙的意味は余剰的であり、果す役割は小さいといえる。

20) これらの例をみる限り v-g を用いた引用表現のタイプ S V-f Q v-g と S Q v-g V-f は表現機能としては変わらないように思える。両者の違いは、前者では、引用部 Q が動副詞形 v-g とともに引用動詞である導入部の述語動詞のあとに置かれている。これら言語の基本語順 SOV と理論的に相関関係にある S Q v-g V-f がおそらく原型で他方は構文的なバリエーションと考えることができようが、実際どちらが一般的に用いられるかは、言語、方言、文体により多少異なっているようである。この節では、基本伝達動詞を意味の観点から検討するため、両者の構文的相違には触れない。

さて、上のような伝達動詞を導入部 Q の述語動詞 V-f にもつ場合、Q のあとに続く基本伝達動詞のもつ具体的な発話行為は引用動詞と意味的には矛盾せず内包されていた。それに対して、次の例では、構文的には同じでありながら、Q の導入部の引用動詞 V-f は必ずしも具体的な発話行為を伴うとは限らない。

Cher.    《Armijšhte ģâna žap šizde erta》 -manân Joġor šonen  
           Only in army, time goes without knowing.   say-g.                    think-f.

[SOVREMENNYJ 1961: 141]

「軍隊にいる時だけは時間が知らぬまにすぎる。」と Joġor は思った。

Voty.    malpazy [unogem baštozy] schuisa (=šuisa 筆者)  
           they think-f.   they will get more   say-g.

[WIEDEMANN 1851: 245]

彼らのもっともらえるだろうと思った。

これらに現われる動詞は「思う」「考える」などの思考動詞に類するものが多く、それらの示す行為には具体的な発話より、内的な発話が伴うとみることができよう。これらの動詞を第2グループの動詞として、基本伝達動詞との関係を図式してみると次のようになろう。

思う [……, (+発話行為), ……]

言う                    [+発話行為]

さらに導入部に来る第3のグループの動詞として「聞く」「知る」など知覚行為を示す動詞が来る場合がある。

Voty.    so užjosyz adžem böre no [ad'ami pi matyndyr] šusa todele  
           this works seeing after and   man son is near.   say-g. know-f.

[WIEDEMANN 1884: 179]

この仕事を見てあなたがたは人の子が近いということを知ろう。

上の第1, 第2グループの動詞と異なり、第3グループの動詞は意味上、基本伝達動詞とは矛盾するといえる。これらの動詞の示す行為は「言う」のような積極的な発話行為は伴わず、逆に外部の情報を受け取るわけであるから、「言う」とは相容れないはずである。これを図で示すと次のようになる。

知る [……, -発話行為, ……]

言う                    [+発話行為]

以上、一つの引用表現に現われる二つの動詞 V-f と v-g の関係を意味の観点から考察してみた。これらにみられた関係としては、Q のあとの v-g の語彙的意味は、Q に先行する導入部の引用動詞 V-f の語彙的意味に内包されるか、あるいはそれと

矛盾している<sup>21)</sup>。これらすべての用法において、v-g の持つ語彙的意味の関与のしかたが同じであると仮定した場合、最も合理的な解釈は、v-g の語幹の語彙的意味はほとんど意識されていないということになるのではないだろうか。

ここまでのべてきた V-f と v-g の語彙的意味の関係は、前章で考察した S V-f Qv-f の構文における V-f と v-f の関係と非常によく似ている。そしてここでも全く同じ理由により、v-g の語彙的意味の喪失とその結果としての小辞性を認めることができよう。しかし、v-g にはさらに v-f には見ることができなかった目的表現ともとれる用法がある。

Cher. “xâtâraš” manân tolânna. [BEKE 1951: 349]  
to chat say-g. we come-f.  
おしゃべりしようとやってきた。

Voty. eksej [kunojosyz adžo] šusa pyrem. [WIEDEMANN 1884: 248]  
king I will see the guests. say-g. enter-f.  
王様は客人たちを見ようと入った。

上の例において、引用部は文末の動詞が示す行為の際の行為者の考えたことあるいは発言したことであるが、Q v-g であっても目的節のような解釈ができる。これと同様の用法が日本語の格助詞「と」にもあり、引用の小辞と目的節を標示する小辞とのあいだの関係はユニバーサルなものであることも考えられる。しかし、日本語では同じ表現を「と言って」を用いて表現できる。

彼は今度こそ合格するぞと勉強した。

彼は今度こそ合格するぞと言って勉強した。

このように「言う」という動詞が用いられることから、述語動詞の示す行為の背景にある理由や目的が実際には内的な発話としてであれ、発話されたものとして認識されている可能性もありうる。したがって、チェレミス語やヴォチャーク語においても、v-g の語彙的意味は除去されてはいないという説明が可能であるが、実際の言語使用の段階では、「言う」という行為はほとんど意識に上っていないと考えられる<sup>22)</sup>。

また感情動詞を V-f にもつ用法もある。

Cher. [šînd'ža bozeš] manân mân lüðam. [SIRO 1948: 70]  
the eye falls. say-g. I fear-f.

21) 基本伝達動詞が V-f にも来る場合、v-g の語彙的意味は余剰的であるが、次のように V-f が否定の場合文字通りに訳せば「～と言って言わない」となり、矛盾することにもなる。

Cher. “erðšm, dol-ok” manân šš man.  
my son, come. say-g. neg.-pret. say-f.

そこで「おいでわが息子よ」とは言わなかった。

これも、v-g は語彙的意味はもたないという一つの例とみなすことができよう。

私は、邪視を注がれることが恐ろしかった。

Voty. so suzerzë [agajez medaz pegd'zë] şuşa kurdasa ni-no-keţso-no  
 that his sister her brother ran away. say-g. fear-g. any where  
 uk koşke. [FUCHS 1952: 207]  
 did not go-f.

その妹は自分の兄弟が逃げてしまったのかと恐れてどこにも行かなかった。

この例において、v-g は日本語では「～と (言って) 恐れた」に相当する役割を果たしていると考えられ、「言う」という動詞が潜在的に結びついていることを示唆している。しかし、このような表現は自動詞により示される感情行為の対象あるいは原因を引用の形式で示しているだけで、実際に「言う」行為自体は感情行為に伴うとは認識されていないのではないかと考えられる<sup>23)</sup>。

最後に示した2つの表現のように、S V-f Q v-f には見られなかった用法においても基本伝達動詞の動副詞形 v-g は、かなり語彙的意味を失っており、この点において一層小辞に近づいているといえる。

## 2. 文法的機能

次に基本伝達動詞の動副詞形が文法的に小辞としての機能を備えているかについて考察することにする。先の第II章においてのべたように、多くの言語では文の中に発話に近い形で文を引用する際には、何らかの統辞的手段が講じられている。一般には接続詞などの名称で呼ばれている引用の小辞が用いられている。これらの機能としては、引用部と導入部の論理的関係を明らかにし(つまり、引用部が、導入部の引用動詞の補文であるということ)、また引用部の境界を標示することにあると考えられるが、一般的にいて、その位置は当該言語のもつ基本語順に左右されることが明らかになった。ここでは、チェレミス語、ヴォチャーク語の引用表現に用いられる基本伝達動詞の動副詞形 v-g の位置に関して述べ、これらの条件を満たすかを考える。

22) この用法が純粋に目的表現として解釈が可能であるということは、当該言語の文法家の多くが基本伝達動詞の動副詞形の用法として「目的表現」という用語をあげていることによって支持される。これら文法書は一般にこの機能を印欧語の目的節を標示する接続詞 独 *damit*, *um zu*, 露 *чтобы* などと対比されている [МАЈТИНСКАЈА 1982: 87]。

ところで印欧語も初原的な目的表現は、目的の内容を直接話法で発話者の思考として主文に並置して表わし、主文との間に論理的従属性が生じたとされる [パウ 1976上: 259]。

23) この v-g の用法も接続詞的な文法素として機能していることは、印欧語の接続詞に訳されることから理解できる。ここにあげたチェレミス語の例には原典ではドイツ語で接続詞 *daß* があてられている。

ich fürchte, dass man mich beängt (dass das Auge fällt)

まず、引用表現の文型の一つ **SQv-g V-f** をとりあげる。この文型において、**v-g** は引用部と引用動詞である文末の述語動詞 **V-f** との間に立っている。したがって、第Ⅱ章で述べた基本語順 **SOV** をもつ言語の一般的傾向と一致していることになる。つまり、ここでは、この **v-g** は、1) 主文の述語と引用部の統辞関係を示し、2) 引用部の境界を標示するのに適切な位置にあるといえる。

さて、もう一つの文型 **SV-f Q v-g** はどうであろうか。これは、前の文型 **SQ v-g V-f** から **Q v-g** が文末に後置されたバリエントである。したがって、基本語順 **SOV** において、補文標識が補文に後置されるという条件は、ここでも **v-g** が **Q** のあとに現われるという語順により保たれている<sup>24)</sup>。引用部は、後置されても、**v-g** が存在することで導入部との関係は明示され、その点においては、引用の小辞としての条件は満たされている。しかし、全体としての構文は、述語動詞の後に補語が来ることになり、これらの言語の基本語順 **SOV** に反し、**SVO** に近い構文をとっている。したがって、**v-g** はこの構文では、本来 **SVO** 型の言語における引用の小辞が、導入部と引用部の間に立って示していた境界標示という機能を果していないことになる。

一方この文型は、先に第Ⅲ章で考察した **SV-f Q v-f** とは、**Q** が後置されるという点において共通しており、異なるのは、**Q** のあとの基本伝達動詞が定活用形か動副詞形かということだけである。そこでも述べたとおり、**Q** が話し手の発話のレベルに紛れ込む可能性はない。しかし、**Q** が **v-g** とともに文末に置かれるという現象はどう説明すべきであろうか。

これを考える際、非常に示唆的なのが、チュルク語やモンゴル語など同じ基本語順をもつ諸語に見られる引用表現形式である。これらも典型的にチェレミス語やヴォチャーク語と同様に **Q** に後置される引用の小辞 **q** をもつが、引用表現として期待される文型 **S Q-q V-f** と並び **S V-f Q-q** がしばしば現われる<sup>25)</sup>。この場合も後者は前者のバリエントと考えられるが、このような現象には何らかの普遍的な理由が想定できると思える<sup>26)</sup>。

基本語順 **SOV** により期待される文型 **S Q-q V-f** をとってみると、**Q** の終りは引

24) このように **v-g** が文末に移された **Q** のあとに来るということは、観点をかえると、これらの言語が本来、述語が目的語(補語)のあとに来る、動詞後置型言語(**SOV**型言語)の証でもある。これと類似したことは他でもみられる。印欧語でも接統詞や前置詞・後置詞などいわゆる小辞の多くは動詞や名詞に起源をもつものが多いが、これらのうちいくつかは、出現当時、もともになった名詞なり動詞なりが占めていた位置を保っている。したがってこれにより、当時の基本語順を仮定する際の傍証となる場合がある。たとえば、「～に関して」という意味で英語には *concerning*、独語には *betreffend* という語があるが前者は前置詞、後者は後置詞として用いられる。それぞれ「関係する」という動詞から発達しているが、このことは前者が目的語の前に動詞を置く **SVO** 型、後者が目的語の後に動詞を置く **SOV** 型言語であったという説を支持しているとされる [VENNEMANN 1973: 31]。

用の小辞 q によって示されるためはっきりしているが、その始めは、明確でない場合がある。これは SVO の基本語順をもつ言語が節頭に接続詞を用いる場合とは対称的である。したがって、引用部が非常に長い場合には、引用部が導入部である主文を分割するために、主文の述語動詞が現われるまで Q の前におかれた主文の主語やその他の付加語を記憶しておく必要がある。したがって話し手、聞き手とも、引用部の続くあいだ、記憶のための心理的緊張を維持する必要があることになる。久野 [KUNO 1974] は、このように補文が主文の要素の間に内包される構成を内包 center embedding と呼び、それに対して現われる補文の外置 extraposition との関係を経験的立場から説明を試みた。それによると、SOV, SVO, VSO の基本語順の違いにかかわらず言語は、一般に内包を嫌い、外置で置きかえる傾向がある。この理由は、内包をとる文の理解には、上に述べたような短期的記憶が要求されるが、それには限界があるため文の理解度を減少させることになる。このような場合言語にはそのような障害をとり除く手段を保有しており、外置はそれに当るとする。

したがって、チェレミス語、ヴォチャーク語に見られる S V-f Q v-g は、S Q v-g V-f において生じる文理解における心理的負担を軽減させるためのバリエーションではないかと考えられる。つまり、S V-f Q v-g の構文は理解度を増すために、S Q v-g V-f においてみられる 1) 引用の小辞 v-g が引用部 Q と引用動詞 V-f との間で果し

25) ここでは、ハルハモンゴル語の例をあげるが、これらがチェレミス語やヴォチャーク語と類型的に似た性質をもつため、系統や借用関係についての問題には立入らない。この言語でも引用の小辞として、基本伝達動詞の動副詞形 gedž (ge-「言う」) が用いられるが、ここではその位置だけに関心があるため q として示す。

Halha

(S)V-f Q v-g.

átadās asūdžā: “bi badžij dawā xānig jāwaln alaxa?” gedž. [HALÉN 1973: 35]

from groom ask-f. How can I kill Badžij Dawā Xāj? say-g.

馬番に尋ねた。「Badžin Dawā Xāy をどうすれば殺せるか。」と。

(S)Q v-g V-f

neg emegenēs “tanaēxj jāgāt egedž xorō xürē-ügüē šar us boltšixsŋ-im-one from oldwoman, Why are the palace and monastery at you overflowing with wheywater in bā?” gedž asūdžā. [HALÉN 1973: 127]

this way? say-g. ask-f.

一人の老女に「なぜあなたのところでは宮殿も僧院もこんなに乳漿であふれているのか。」と尋ねた。

これが典型的な問題であることは、ここで示すチュルク語などと系統・借用の面においてほとんどつながりのないと思える古代インドのヴェーダの言語にも同様のバリエーションが見られることによっても納得できる。第二章では SOV の基本語順をもつヴェーダの引用表現として、Q-q V-f のように引用部と引用の小辞が V-f の前に来る例を示したが、バリエーションとして、Q-q が V-f に後置される例も多い。

sá tvášťā cukrodha kuvín me putrám ávadhid íti [LEHMANN 1974: 55]

get angry-f. whether he killed my son q

Tvášťā はおこって言った「彼はわしの息子を殺したのか」と。

26) これについては拙論 [SHOJI 1985] で詳しく論じたので、ここでは要点のみを述べる。

た補文境界標示の機能と、2) SOV という基本語順と一致することによる安定性、という二点を犠牲にしたものである。したがって v-g の引用の小辞としての本来の統辞的機能は、S Q v-g V-f においてより顕著に現われているといえよう。

### 3. 形 態

さらに小辞として認められるための形態上の条件、つまり語形変化を行わず、定まった形をもっているということがある。これについては *manân*, *šuisa* とも動副詞の形態をとっており、定動詞形のように主語の人称、数や時制による変化は行なわない。したがって、固定した形態を一つもつのみで、この点においても小辞の条件は満たしているといえる。

## V. 小辞化の過程

先の第IV章では、基本伝達動詞の動副詞形は、その意味・機能・形態において、引用の小辞としてかなり発達した特性を示すことを論じた<sup>27)</sup>。この章では、このような特性は、これらの言語の内的な発達によって生じたものとして説明しうるかどうか、いままで考察した用法を典型的に比較しながら、発達過程を推測してみる。

たとえ基本伝達動詞が、引用の小辞とみなしうる要素に発達したとしても、それは複雑な過程を経てきていると思われる。ここでまず明らかにしておく必要があるのは、第二章で考察した引用表現のタイプ S V-f Q v-f と、動副詞形を用いた表現のうち基本形のバリエーションとみなした S V-f Q v-g との関連である。この二つのタイプは構造上類似しているが、両者の間の相違は単に後者において、基本伝達動詞の定活用形が動副詞形をとったため生じたというように単純なものではない。双方において基本伝達動詞は、本来の語彙的意味「言う」を同様に失ってはいても、統辞的には、定活用である v-f は述語として文を終らせる形態をとっているのに対し、v-g の方は Q に先行する主文の述語を修飾する副詞句となっている。前者は、導入部と引用部という二つの文による分析的表現であったとすれば、S V-f Q のように S V-f と Q を並置する表現のあとに続いて現われた、かなり古い表現といえる。それに対して、後者 S V-f Q v-g は、先に述べたように S Q v-g V-f のバリエーションとして現われたも

27) Schlachter [SCHLACHTER 1973: 208-9] も同様に *manân* と *šuisa* が意味的には「発話」のコンテキストから解放され、接続詞の機能を満しているとする。*manân* の用法をいくつかに分類したものとしては、[VASIKOVA 1981], [SOVREMENNYI MARIJSKIJ JAZYK 1961: 75-78], *šuisa* では [PEREVOŠTŠKOV 1959: 224-248] などがある。

のであり、v-g の小辞としての用法はすでに S Q v-g V-f において存在したと思われる。そしてその v-g の引用の小辞としての用法は、突然出現したとみなすより、基本伝達動詞が、本来の意味「言う」と動副詞の機能において用いられていたものが、次第に発達してきたと考えるのがもっとも自然であろう。したがって、ここでは、現在の種々の引用表現の中から、v-g の本来の意味と機能に近い用法を順に並べることにより、発達過程を推測してみることにする。

問題の要素が本来もっていた機能とは、動副詞という名が示すとおり、動詞を語幹とする副詞の機能である。つまり、これが含まれる文の述語動詞を修飾することにある。これは、述語動詞の示す行為に対して、動副詞形をとっている動詞の示す種々の行為の論理関係（例えば、時間的前後関係、条件、原因、理由、目的など）を示すことになるが、一般に動副詞形の種類によりその示す関係は異なっている。

チェレミス語やヴォチャーク語で引用表現に用いられる動副詞接辞はそれぞれ *-an* (*-an*) と *-sa(-isa)* で表わされるが、いずれも当該言語ではひんばんに用いられ、また用法も非常に多様である。引用の小辞としての機能は、これら用法のうちから発達してきたものである。これら動副詞の機能が小辞の機能へと発達する過程をチェレミス語とヴォチャーク語について、共通の用語で論ずるため、これらの動副詞のもつ多様な用法をまず大きく三つに整理することにした<sup>28)</sup>。

まず最初は次の例に見られるように、時間的には述語動詞の行為に近接、あるいは同時的な行為を示すが、どちらの行為をも論理的には主従関係（例、手段、条件、因果など）におかず、等位関係にある行為とみる。つまり、統辞的には述語に対して従属する動副詞により、論理的に文等位的な関係を表現しているといえる。

**Cher.** Tušo kuržân tolšn puren lektân kajšs<sup>29)</sup> [ALHONIEMI 1985: 143]  
 he run-g. come-g. enter-g. come out-g. went

彼は走って来て、中へ入って、出て行った。

**Voty.** tuž kema bördiša kuřrem [STIPA 1960: 230]  
 very long weep-g. died

長い間泣いて、死んでしまった。

この例によるような用法においては、論理的関係は積極的には示されず、文脈にその解釈はゆだねられているといえる<sup>30)</sup>。

28) これらの動副詞の用法については次の文献を参考にした [BEKE 1914/15: 67-72, FOKOS-FUCHS 1958: 324-326, STIPA 1960: 228-231, 271-277, BARTENS 1979: 143-150, 215-221, WIEDEMANN 1884: 179, ALHONIEMI 1985: 141-144]。

29) この文には動副詞語尾 *-(š)n* が4回用いられているが、*kuržšn* と *lektšn* にみられる用法は、次に述べる従属的用法はこのあとに述べる用法に属する。

次の用法では、動副詞の示す行為は、時間的には述語動詞の行為と同時に、先行しており、それに付随する様態、目的、あるいは手段などを示し、論理的には従属的な関係を表現している<sup>31)</sup>。

**Cher.** Äkäm tãḡârēm êryen ššnzä. [ALHONIEMI 1985: 142]  
my sister shirt knit-g. sit

妹がシャツを編みながら座っている。

**Voty.** pijosmurt, vâuzze ut't'sasa, šai vjuzε pirem [STIPA 1960: 27]  
servant his horse search-g. grave up came

召使いが、自分の馬を捜しながら墓場までやって来た。

前述した等位表現では、論理的に二つの行為は独立したものとしてみなすことができた。しかし、この場合には、動副詞の示す行為は論理的に述語動詞の行為に従属している。

第三の用法では意味上もっとも中心となるべき主行為は動副詞によって示される。動副詞につづく定活用形の動詞がその主行為に継続、完結、結果、瞬時、開始などの相的 aspectual な意味を与える表現である<sup>32)</sup>。

30) このような動副詞の用法は、ウラル諸語の中では、これらチェレミス語とヴォチャーク語の動副詞に限られているようである。しかし、チュルク諸語やモンゴル諸語にはきわめて、一般的で [FOKOS-FUCHS 1962: 105, POPPE 1951: 104, BEKE 1914/15: 69-72], 等価である行為を並べて表現する際、最後の動詞を定活用する以外は、動副詞で続ける。チュルク系チュパッシュの例をあげる。

Chuvash mol'óžänä kajzä vjrt! [BEKE 1914/15: 69]  
to bed go-g. lie

ベッドへ行き、横になった。

これと同じような機能は次の例に見られる日本語のように、未然形や「て」の助詞により示される場合が多い。

朝起き、服を着た

朝起きて、服を着た

これらの例では「朝起きた」と「服を着た」と関係は文等位であるといえる。

なお、チェレミス語やヴォチャーク語の用法をチュルク諸語の影響とする説がある [BEKE 1914/15: 67, 72]。

31) このように論理的に述語動詞に従属するような関係を動副詞によって表現する方法は、チェレミス語、ヴォチャーク語やいわゆるアルタイ諸語の他、他のウラル諸語にも広く発達している。たとえば、述語動詞の行為に伴う様態や手段を示す（「～しながら～」）の動副詞などは多くの言語に見られる。チェレミスと同じヴォルガ系に属するモクシャモルドヴィン Mokša Mordvin の *-z* を接尾辞にもつ動副詞の例をあげる。

son kolmolšt jafod's, keš sojn vεḡksa pñansn. [BARTENS 1979: 71]  
he three times hit-g. cut its nine head

「彼は3回振りおろして（おろすことにより）、その9つの頭を切りとった」

ところで、このような従属関係は、先に考察した等位関係と同じ文型によるため、実際に区別するのが困難である場合がある。日本語の場合でも、先にあげた表現に相当する、未然形や「～して～」のように助詞でを用いた表現は、ここにあげたような用法にも用いられることが多いため、果してどちらの関係を表わしているかの区別が容易でない場合が多い。

**Cher.** Lūdōn kajōšm. [ALHONIEMI 1985: 144]  
 be surprised-g. went  
 おどろいてしまった。

**Voty.** muketze kjiržasa šot. [BARTENS 1979: 218]  
 another sing-g. give  
 もう一つ歌ってくれ。

この例に見られるように、定活用形をとる述語動詞として現われるのは、「与える」、「取る」、「生きる」「残る」「投げる」など具体的な行為を示す動詞で、これらが動副詞形と一緒に用いられる場合、動副詞の示す行為に抽象的な相の意味を付加している。この最後の用法は特に引用表現には関係していないと思える。

さて、次に問題の基本伝達動詞が上にあげたような本来の意味と機能において用いられていると思える例をあげてみる。

**Cher.** mari “om jarsō” manōn ta βolen oyāl ere βopšōmak βelō  
 man there is no time. say-g. and did not come down only digged  
 kūnčēn. [ALHONIEMI-SAARINEN 1983: 56]  
 beehive

男は「時間がないんだ」と言って、降りて来ず蜂の巣を掘るだけだった。

**Voty.** objida “ojo-ske, ašim vozmato!” suīsa nuem...  
 forest spirit come I will show you myself say-g. carried  
 [WICHMANN 1901: 59]

森の精は「こっちに来い、おまえにおれ自身を見せてやる」と言って、(彼を)連れて行った。

上の例において、文末の述語は引用動詞ではなく、一般的な行為を示している。論理的に、引用部を補文とする v-g の表わす、「言う」行為は、文末の述語動詞の行為からは独立した別個のものである。つまり、引用部につづく基本伝達動詞は単独で引用部をうけており、文字通り「言う」という発話行為を示している。ここでの動副詞形のもつ機能は、この伝達行為と述語動詞の行為が時間的に近接しており、また等価で

32) このチュレミス語、ヴォチャーク語における表現形式は相的(アスペクト的)複合動詞構造と称される [BARTENS 1979: 147-8, 217-8]。

これと同じような表現形式はチュルク諸語やモンゴル諸語に発達している [BEKE 1914/15: 69-72]。これらの言語においてもチュレミス語やヴォチャーク語と同じような動詞が述語動詞に用いられ、それらの表わす相も類似している。次はチュルク系チュパッシュの例である。

Chuvash šundaržā jarāššo [BEKE 1914/15: 70]  
 burn-g. sent

それは燃やされてしまった

なお、この用法をチュルク諸語などからの影響とする説がある [BEKE 1914/15: 67]。

あるという等位関係の表示である。つまり上にあげた第一の用法にあたる。すでに基本伝達動詞は本来の語彙の意味「言う」において用いられ引用を補文とする際、何の補文標示も必要としない構文 S Q v-f において現われ得るということを明らかにしたが、上のような例は、この S Q v-f として独立した表現の v-f を v-g にすることにより、文末の動詞によって示されている別の行為の表現と統辞的に統合しただけといえる。したがって、次のように動副詞を用いるかわりに、基本伝達動詞を定活用形で終止させ、文等位接続詞であとの部分を接続する場合と内容はほとんど変わらないはずである。この段階では v-g は小辞の機能は全く果していない。

Voty.     gondîr “tañj tatiñ” šuem no as gwaz nuem     no borzasa  
           bear    look here.    say-f. and into his own pit carried and closed up  
           ponem. [WICHMANN 1901: 79]

熊は「こっちを見ろ」と言って、それを自分の穴に入れて閉じてしまった。

これに対し、次に見る例は引用表現であるが、基本伝達動詞の動副詞形は、述語動詞に対して上にあげた動副詞の第二の用法に近い関係を示しているように見える。

Cher.     Bara molan ūžâktššda?—manân Osman jodo [SOVREMMEŅYJ  
           why did they invite? say-g. Osman ask-f.  
           1961: 148]

「なぜ呼んだんだ」とオスマンは尋ねた。

Voty.     vištem... “agaj, so mar?” šusa ššjrektem [WICHMANN 1901: 78]  
           clown       brother, what is it? say-g. shout-f.

まぬけ者は「兄弟、それは何だ」と叫んだ。

これは全体の構成からいって、先に示した例と全く同じ形 Q v-g V-f をとっている。但し、上と異なり文末の動詞は、「話す」「尋ねる」「命ずる」「叫ぶ」など具体的な発話行為を伴う行為を表わす。このように v-g を用いた引用形式は、「～と（言いながら～言って）尋ねた」(asked saying～) 「～と（言いながら～言って）話した」(talked saying～) と一般に訳されるように、基本伝達動詞の「言う」行為は主動詞の「尋ねる」「話す」などの伝達行為の様態や手段として扱われている場合が多い。つまり、引用部 Q v-g は V-f に対して従属的な関係にあるととられているわけである。この形式が一般に引用表現として、用いられているケースを考えると、上に述べた場合とは異なり、「言う」行為と文末の動詞の示す「尋ねる」あるいは「話す」行為など、二つの別個の行為を表現しているとは思えない。すなわち文末の述語動詞が唯一の引用動詞として認識されているといえる。にもかかわらず、基本伝達動詞が用いられて

いるのは、おそらく一般の伝達動詞は単独で引用を補文とできなかつたからではないかと思われる。これは、すでに述べたように、引用部のあとに現われ得るのは基本伝達動詞だけであるらしい事によっても推測できる。したがって、伝達動詞が引用部を伴おうとする際、基本伝達動詞を介する必要があったとするのが納得のいく唯一の解釈であろう。

このように、上にあげた例は、引用部を伴う基本伝達動詞が動副詞形をとり、述語の伝達動詞に対して従属的な関係にある行為を示す表現形式をとったものと考えられる。しかし、このような引用表現形式は簡単に出現したとは言いがたい。なぜなら、実際には引用を伴う発話行為は、行為としては一つしか存在しない。これを「言う」行為とさらに別の発話行為との二つの行為により分析的に表現した背景には、その前段階として、実際に具体的な「言う」行為を他の行為と動副詞によって結合する表現形式がモデルとして既に存在していたと考えるのが自然であろう。

おそらくこのモデルとして用いられたのが、上で動副詞の第一の用法としてあげた構造的には同じ表現である。つまり、引用を伴う具体的な「言う」行為が、動副詞形をとることにより、文末に置かれた動詞の示す他の行為と等価的<sup>33)</sup>に結びつけられていた表現形式である。この文末の述語動詞の位置に伝達動詞を置くことにより、伝達動詞が引用を行う表現を分析的に行う形式が可能になったと考えられる。しかし、はじめからここに現われるようになった基本伝達動詞の動副詞形が引用の小辞として機能したとは思えない。第一の用法で、他の動詞と等価的行為として表現されていた場合のように、「言う」行為は具体的なものとして把握されていたのであろう。しかし、第一の用法の示す等位的関係と第二の用法の示す従属的な関係の解釈は、本来非常に区別しにくい、文脈に依存するものである。したがって、等位的な関係から従属的な関係の解釈へ無理なく移行していったと考えられる。この結果、v-g は文末の伝達動詞がその発話行為に伴う引用行為として解釈されたと思う。このあと、V-f の位置に種々の伝達・思考・知覚的動詞が来ることにより、v-g の語彙的意味「言う」は、引用表現において次第に関与性を失い小辞に近づいて行ったのであろうが、この段階では、日本語でも「～と言って尋ねた」「～と言って叫んだ」という表現が可能なことからも、語彙的意味はある程度保持されているといえる。したがって、引用部も文末の伝達動詞の完全な補語とはなっておらず、これだけではv-g の引用の小辞的性格も十分とはいいがたい。

33) 引用表現を基本伝達動詞の示す「言う」行為と実際の発話の様態を示す発話行為という二つの部分に分析し、これらを文法的には等位関係において表現しようとした例は、既に S V-f Q v-f でも見た。

おそらく、文末の述語動詞として、この次の段階にあらわれるのが、必ずしも具体的な発話行為を伴わない一連の動詞である。これらは IV-1 において第二グループの動詞と呼んだが、「思う」「考える」などに相当する思考動詞とも呼べるものである。これら思考動詞が基本伝達動詞と一緒に現われるのは、次のような理由によると考えられる。思考行為自体は抽象的なものであるが、これらの行為の対象となる内容は実際の発話に類似し、陳述性があるため、内的な発話として、あたかも「言う」行為が伴うと解釈されたためであろう。したがって、この思考動詞が現われる表現は、上の伝達動詞の現われる表現の形式を適用したものであるといえる。

Cher.    «Armijâšte x̄sna žap šižde erta»-manên Joğor šonen.  
           only in army time goes without knowing   say-g.                    think-f.

[SOVREMENNYJ 1961: 141]

「軍隊にいるときだけは時が知らぬ間にすぎる」と Joğor は思った。

Voty.    «marlĭ bon tunnâ tätt'šom-na?» šusa malpaškam  
           Why I must jump in today?       say-g. consider-f.

[FUCHS 1952: 60]

「どうして今日も跳び込まないとだめなんだ。」と考えた。

さらに、この形式を用いたと思えるのが、次のように述語動詞に「聞く」、「感じる」、「見る」、「知る」など、発話行為はもちろん、思考行為も伴わない動詞を用いた構文である。これらは、IV-1 では第三グループの動詞として扱ったが、これらに共通していることは外部へ情報を出すわけでもなく、内部で作るわけでもなく、ただ外部から情報を受け取っているということである。したがって積極的に「言う」という意味をもつ基本伝達動詞とは相入れないことになる<sup>34)</sup>。

Cher.    Barman kas ten mijat       kolôšteš, [mom oljat], manên.  
           Barman went in the evening and   listen-f.    what they speak   say-g.

[SIRO 1939: 20]

Barman は晩に行って、彼らが何をしゃべっているか聞いた。

Voty.    [Isav ūl'šu murtem puñyt lykte] šusa kylem [WIEDEMANN 1884:  
           Isav comes with 400 men       say-g. hear-f.

243]

(彼は) Isav が400人の男たちと出迎えると聞いた。

34) 日本語でこれに相当する表現に「言って」を加えることはできない。

\* 彼は正しいと言って聞いた。

この表現において v-g で示された要素を印欧語で示すなら、純粹の補文接続詞 英 that, 独 daß などに相当しよう。

I heard that he was honest.

ここでは引用部は、論理的には述語動詞の示す知覚行為の対象を表わしていることになり、統辞的には、述語の補文となっている。上の例における v-g の主語は、いままでと同様に述語動詞 v-f の主語と同じで、文字通り訳せば「～と（誰かが）言うのを聞いた」ではなく「～と言って聞いた」となる。この用法にいたって、基本伝達動詞の本来の語彙的意味はこれら知覚動詞のそれと矛盾することになるため、実際には、話者によって全く認識されていないといえよう。したがって、v-g はここでもっとも補文標識として、小辞に近い機能を果していることになる。

ところで、これらの動詞が補文とするのは実際の発話ではなく、また思考内容でもないわけであるから、これらを用いた表現も本来の引用表現とはいいいがたい。それではなぜこれらの動詞に引用表現の形式が用いられるのであろうか。理由として考えられるのは、これらの動詞は性質上、引用のように陳述性の強い文を補語としてとる必要がなく、本来、補文を表現する方法が全く発達していなかったためと考えられる。代わりに、動名詞や不定詞、分詞など動詞の名詞形を補語にとっていたはずで、これらを用いた表現は今も盛んにおこなわれていることから想像できる<sup>35)</sup>。これらが補語として、引用表現形式の補文をとるようになったのは、上のような伝達や思考表現の形式が定着し、補文をとることができる統辞的構造として確立したからであろう。したがって、知覚動詞が、引用表現の形式を利用して、補文をとるようになったのは新しいことだといえよう。

また、この文型 S Q v-g V-f は引用表現だけでなく、述語動詞 V-f の行為に対する行為者の目的(IV-1の例参照)、あるいは理由・原因など思考的背景を表現する場合にもあらわれる。

Cher. [Rajkom sekretar' tuðôn mutšâm kolôn oxâl] manân, Metrij  
Secretary Rajkom did not hear his word. say-g.

35) 一般に、「見る」「聞く」「知る」など知覚動詞は対象をそのまま知覚するわけであるから、内容に知覚者（発話者ではなく）の情的態度あるいはモダルが内容に付加することはない。このような要素が含まれる陳述性の強い文は一般に名詞化することが困難であるが、知覚動詞の場合はそれらを含めため名詞化しても不都合でなかったと推測できる。

例えば次のチェレミス語の例において、述語動詞 užâm 「(私が) 見た」の目的語 tolmâžžâm は動詞 tol- 「来る」に分詞語尾 -mâ が接続し名詞化したものに、更に三人称の人称語尾と対格語尾が加わったのである。

Cher. kapšta-wičôxoc tæðn tol-mâ-žž-m užâm [BARTENS 1979: 124]  
from vegetable-garden your come-分詞-3人称-対格 I saw

あなたが菜園から来るのを見た。

上の日本語の訳も「来るのを」となっているように名詞化している。ところが次のように陳述性のある内容を引用部にもつ引用表現では、引用部を名詞化できない。

彼は「ぼくは正しいよ」と語った。(引用表現)

\* 彼は自分が正しいよことを語った。(名詞化)

lūdδ̄nat kolt̄š. [ISANBAEV 1961: 94]  
get surprised-f.

Rajkom 秘書が彼のことばを聞いてなかったと Metrij はびっくりしてしまった。

Voty. So surerz̄e [agajez medaz peyd'z̄e] šur̄esa kurdasa ni-no-k̄et̄s̄e-no  
that his sister her brother ran away say-g. fear-g. anywhere

uk košk̄e [FUCHS 1952: 207]  
did not go

その妹は、自分の兄弟が逃げてしまったのかと恐れてどこにも行かなかった

v-g の前の Q は実際の発話というより、行為者の思考内容という方が適切であろう。この点、述語動詞に「考える」「思う」など思考動詞を用いる表現と共通している。しかし、ここでは、思考動詞が欠けており、形の上でこの表現は、動副詞の第一の用法の場合のように、Q v-g は文末の一般動詞と結ばれている。ところで動副詞の第一の用法は述語動詞との等位関係を示していた。しかしここでは、Q の内容が、述語動詞の示す行為に伴う、行為者の思考内容を示しているため、場合により目的、原因、理由などに解することができる。したがってこの表現形式だけをとってみると、v-g は英語なら so that, because, のように印欧語の従属接属詞にも相当する高度に文法的な要素とみることができる。日本語で「合格するぞと勉強した。」の場合の助詞「と」に相当する機能をもっているといえる。しかし、この場合でも「と」のあとには「言って」「思って」などを補うことも可能で、たとえこれらが無い場合でも、それらの存在が含意されているといえる。これと同じく、チェレミス語とヴォチャーク語の場合においても実際には「言う」の語彙的意味が保持されているか、あるいはこのあとに、「思う」など思考動詞が省かれているとも解釈できる。なぜなら、目的や原因を表わしている引用部はモデルを含んだ陳述性を保っており、発話であるという束縛から抜けきっていないからである。この表現には、思考内容を内的発話としてとらえた点において、思考動詞を述語にする表現と共通している。この表現のあらわれた理由は二通り考えられる。一つは、この表現は、問題の部分 Q v-g が、本来、思考動詞を後にもっていたが、思考動詞を失ったという可能性である。つまり、思考動詞を引用動詞とする表現のように Q v-g のあとに思考動詞をもち、さらにそれが動副詞形をとって、他の行為を示す動詞と結びついていたと考えられる (Q v-g V-g V-f.)。そして、この構文から思考動詞 V-g が落ちたあとも、Q v-g がそのまま目的や原因など文末におかれた動詞の行為の思考的背景とみなされたということである。もう一つ

の可能性は、ここで思考内容としている Q は他の行為に伴う際には実際の具体的な発話か、それに近いものとみなされ、基本伝達動詞のみで用は足りたとも考えられることである。そしてこれが動副詞形で文末の動詞に統辞的に結びついて Q v-g V-f という構文を形成したと推測されるが、この段階では v-g には実際に「言って」という語彙的意味は顕在的であった。しかし、Q の内容自体が述語動詞の示す行為と論理上、目的・原因という関係にあったため、v-g の語彙的意味「言う」は認識されなくなり、単なる目的節標識と解釈されるようになったのであろう。上のいずれの場合にせよこの v-g は見かけは目的・原因節の標示素と見なされやすいが、実際は、基本伝達動詞の本来の語彙的意味に引きもどされる可能性を常に有しているといえる。

以上、基本伝達動詞の動副詞形 v-g をもちいたいくつかの表現をみてきた。S Q v-g V-f という共通した形式をもちながらそれぞれにおいて、引用部 Q と動副詞形 v-g の形成する部分と述語動詞 V-f の示す行為の論理的関係は異なっていた。第一の場合は基本伝達動詞による単純な引用行為と他の行為がただ一つの文に統辞的手段で結ばれているだけであった。第二の場合は具体的な発話行為の内容、第三は思考行為の内容、第四では、知覚行為の内容として文末の述語動詞が引用部 Q を受けていた。この際 Q と V-f の間におかれた v-g の語彙的意味「言う」は、それぞれの述語動詞との関連において、全体の表現へ関与する度合いが異なる。したがって文法要素としての v-g の小辞的な特徴にも程度の差は存在する。小辞の特徴は第一の用法では見られないが、第二、第三、第四という順に増大する。さらに、第五では引用部は述語動詞の行為の背後にある目的や理由を表わす。一見すると引用部は、主文に対して従属節を形成しており、v-g はもっとも小辞として発達したように見えるが、実際には、第二、第三の表現に近いと思われる。以上のように小辞的な程度は各用法により異なるが、一方では、これらの用法は相互に関連しあっていることも事実で、全体として一つの連続体を成している。そして、重要なことは、基本伝達動詞と動副詞によって形成された v-g が、引用の小辞として果す特殊な機能は、突如獲得されたという性格のものではないということである。むしろ、この章でみてきたように、その小辞としての機能は、基本伝達動詞と動副詞の本来の用法と連続性を保ちつつ、その延長線上に発達してきたと考えられる。

## Ⅵ. 結 論

引用を文中にとり入れる際、SOVを基本文型とするチェレミス語、ヴォチャーク語では、引用部と文末の引用動詞の間に、それらの間の論理的関係を明らかにし、境界を示す要素が必要となる。この要素として、これらの言語では、「言う」に相当する基本伝達動詞の動副詞形が用いられている。本稿では、この要素の出現が、内的な要因により、また内的な発達として出現したものとして説明可能かどうかを検討した。その結果、内的な発達としてかなり説明が可能であるという印象をうけた。その理由として、基本伝達動詞の語彙的意味の領域が広く、他の動詞と結合しやすいことや、単独で引用をそのまま補文とすることができることがあげられる。また問題の動副詞形の機能も広く、明らかな従属関係の他に、行為を等価に結びつける機能が含まれたことも重要である。はじめにのべたとおり、いままで、基本伝達動詞の動副詞形を用いた引用表現形式はチェレミス語、ヴォチャーク語に強い影響を与えてきたチュパッシュ語やタタール語などからの借用とされてきた。この表現形式の発達に重要な条件であった語順、基本伝達動詞の語彙的・統辞的特性、多機能的な動副詞形の存在のどれをとっても、周囲のチュルク系諸語の特徴でもあることは事実である。したがって、もし、この引用表現形式がチュルク系諸語からの影響によるものであるとすれば、この表現形式がそのまま借用されたとするより、語順や動副詞を含めたより大きい影響関係を想定しなければならない。さもないとチェレミス語やヴォチャーク語において、この引用表現形式が、上にのべたような他の言語事象との間にもつ連続性と整合性を説明できないことになる。しかし一方では、このような語順、動副詞、基本伝達動詞などの類型的条件は、系統や影響関係を想定せずとも比較的満たされやすいものでもある。本稿で検討した引用表現形式は、このような類型的条件が備わっていればどのような言語でも起り得るといふ普遍的性質をもつものかどうか、今後の研究の課題としたい<sup>36)</sup>。

## 謝 辞

本稿は早稿段階で和田祐一教授、永ノ尾信悟助手、八杉佳穂助手に多くの不備を指摘していただいた。また論旨に関しては、Saranskのチェレミス研究者 Jurij Anduganov 氏、Ustinovのヴォチャーク研究者 A. F. Šutov 氏および民博外国人研究員 Juha Janhunen 氏の賛同と支持をうけ、執筆の大きな励みとなった。上記諸氏に厚く感謝する。

## 文 献

- ALHONIEMI, Alho  
1985 *Marin kieliooppi*. Helsinki: Suomalais-ugrilainen Seura (SUS).
- ALHONIEMI, Alho & Sirkka SAARINEN  
1983 *Timofej Jevsejevovs Folklore-Sammlungen aus dem Tscheremissischen*. I. Mémoires de la Société Finno-Ougrienne (MSFOu) 184, Helsinki: SUS.
- BARTENS, Raija  
1979 *Mordvan, tšeremissin ja volžakin konjugation infiniittisten muotojen syntaksi*. MSFOu 170, Helsinki: SUS.
- BARTSCH, R. & T. VENNEMANN  
1972 *Semantic Structures: A Study in the relation between semantics and syntax* Frankfurt am Main: Athenäum Verlag.
- BEKE, Ödön  
1914-15 *Türkische Einflüsse in der Syntax finnisch-ugrischer Sprachen*. *Keleti Szemle* 15: 1-17.  
1951 *Volksdichtung und Gebräuche der Tscheremissen (Maris) I Band*. Budapest: Akadémiai Kiadó.

36) 基本伝達動詞の動副詞形を用いた同様の表現がドラヴィダ系の Kolami 語にも存在する。

amd niv ta'ŋ vattiv en-a ve'to'lt'en [EMENEAU 1961: 113]

he 'why did you come?' say-g. asked

彼は(私に)なぜ来たのかと尋ねた。

この en-a は en 'to say' に継続的動副詞形 (continuative gerund) -a が接続したものである。この動副詞は本来次のように用いられる。

a'n ta'd tiv-a putt'an [EMENEAU 1961: 106]

I rope pull-g. broke

私は縄を引いて(それを)壊した。

また上の an-a は行為の原因の表現にも用いられ、チェレミス語、ヴォチャーク語と驚くべき類似性を示している。

a'n saatun en-a artan [EMENEAU 1961: 114]

I am going. say-g. wept

私は行くんだと(言って)泣いた。

同様の例はインド系シンハリ語にも見られる。引用の小辞の機能は *kiyala* が果している(例文はスリランカ・ケラニア大学 M. H. Goonatillaka 氏との私信による)。

ada enəva kiyala ohu kivuva

today come. q. he said

今日来ると彼は言った。

また *kiyala* により行為の目的を示すことができる。

mamə igenəgəntə kiyala vapə:netə aiva.

I to study q. to Japan came

私は学ぶため日本に来た。

*kiyala* は *kiyanava* 'to say' に行為を結合させる機能をもつ動副詞 *la* を接続したものである。

この *la* の通常の機能を下に示す。

mahatteatə eekə teeri-la giaa [GAIR 1970: 153]

master that understand-g. went

主人はそれを理解して立去った。

これら2つの言語は、チェレミス語やヴォチャーク語、あるいは、いわゆるアルタイ系といわれる諸語とのあいだに系統・影響関係はまず考えられない。したがって、ここに示したような「言う」という動詞の特殊な用法はこれらの基本語順 SOV と動副詞形の機能が原因していると考えられる。

- BRUGMANN, Karl  
 1916 *Vergleichende Laut- Stammbildungs und Flexionslehre der indogermanischen Sprachen*. 3: 2. Grundriss der Vergleichenden Grammatik der Indogermanischen Sprachen, II Band. Strassburg: Karl J. Trübner.
- COMRIE, Bernard  
 1981 *The Languages of the Soviet Union*. Cambridge: Cambridge University Press.
- EMENEAU, M. B.  
 1961 *Kolami A Dravidian Language*. Annamalai University: Annamalainagar.
- FOKOS-FUCHS, D. R.  
 1958 Die Verbaladverbien der permischen Sprachen. *Acta Linguistica Academiae Scientiarum Hungaricae*. VIII: 273-342.  
 1959 *Syrjänisches Wörterbuch I-II*. Budapest: Akadémiai Kiadó.  
 1962 *Rolle der Syntax in der Frage nach Sprachverwandschaft*. Ural-altaische Bibliothek 11. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- FUCHS, D. R.  
 1937 Übereinstimmungen in der Syntax der finnisch-ugrischen und türkischen Sprachen. *Finnisch-ugrische Forschungen* 24: 292-322.  
 1952 *Volksbräuche und Volksdichtung der Wotjaken*. Aus dem Nachlasse von Bernhard Munkácsi. MSFOu 102, Helsinki: SUS.
- GAIR, W. James  
 1970 *Colloquial Sinhalese Clause Structures*. The Hague: Mouton.
- 国立国語研究所 (編)  
 1951 『現代語の助詞・助動詞——用法と実例——』国立国語研究所報告3. 東京: 秀英出版。
- GREENBERG, Joseph H.  
 1963 Some Universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements. In J. G. Greenberg (ed.), *Universal of Language*, The M.I.T. Press: 73-114.
- HAARMANN, Harald  
 1970 *Die indirekte Erlebnisform als Grammatische Kategorie. Eine Eurasische Isoglosse*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- HALÉN, Harry  
 1973 *Nordmongolische Volksdichtung*. Gesammelt von G. J. Ramstedt, MSFOu 153, Helsinki: SUS.
- ISANBAEV, N. I.  
 1961 *Deepričastija v marijskom jazyke*. Jožkar-Ola: Marknigoizdat.
- ITKONEN Erkki  
 1966 *Kieli ja sen tutkimus*. Helsinki: Werner Söderström Oy.
- KARAHKA, Eino & RÄSÄNEN Martti  
 1949 *Gebräuche und Volksdichtung der Tschuwassen*. Gesammelt von Heikki Paasonen, MSFOu 94, Helsinki: SUS.
- KERTÉSZ, M.  
 1923 Über die finnisch-ugrische wortfolge. *Finnisch-ugrische Forschungen* 15: 46-64.
- KUNO, Susumu  
 1974 The Position of Relative Clauses and Conjunctions. *Linguistic Inquiry* 5(1): 117-136.
- LEHMANN, Winfred P.  
 1974 *Proto-Indo-European Syntax*. Austin: University of Texas Press.
- LEWY, Ernst  
 1922 *Tscheremissische Grammatik. Darstellung einer wiesentscheremissischen Mundart*. Leipzig.
- LIIMOLA, Matti  
 1951 *Wogulische Volksdichtung*. Gesammelt und übersetzt von Artturi Kannisto, I. Band, MSFOu 101, Helsinki: SUS.
- MAJTINSKAJA, K. E.  
 1982 *Služebnyje slova v finno-ugorskich jazykah*. Moskva: Nauk.

三上 章

1972 『現代語法序説』 くろしお出版。

NOONAN, Michael

1985 Complementation. In Timothy Shopen (ed.), *Language Typology and Semantic Description 2*: 42-140, Cambridge: Cambridge University Press.

パウル, ヘルマン

1976 『言語史原理』(上) 福本喜之助訳 講談社。

PEREVOŠŤKOV, Petr Nikolaev

1959 *Deepričastija i deepričastnye konstrukcii v udmurtskom jazyke*. Iževsk: Udmurtskoe kniznoe izdateljstvo.

RAVILA, Paavo

1941 Über die Verwendung der Numeruszeichen in den uralischen Sprachen. *Finnisch-ugrische Forschungen* 27: 1-137.

SCHLACHTER, Wolfgang

1973 Syntaktische Beiträge zur Geschichte der finnisch-ugrischen Konjunktionen. *Finnisch-ugrische Forschungen* 40: 202-213.

SEREBRENNIKOV, B. A.

1963 *Istoričeskaja morfologija permskih jazykov*. Moskva: Nauk.

庄司博史

1983 「ウラル語族における等位表現の類型」『国立民族学博物館研究報告』8(2): 424-488。

SHOJI, Hiroshi

1985 On the development of quotation particles in Cheremis and Votyak from the verb of saying in finite form, *The Journal of Intercultural Studies* 7. (in Press)

SIRO, Paavo

1939 *Tscheremissische Texte*. Gesammelt von H. Paasonen, MSFOu 78, Helsinki: SUS.

1948 *H. Paasonens Ost-tscheremissisches Wörterbuch*. Helsinki: SUS.

1964 *Suomen Kielen Lauseoppi*. Helsinki: Tietosanakirja Oy.

*Sovremennyj marijskij jazyk*

1961 Morfologija. Pod red. N. T. Pengitova i dr., Joškar-Ola: Marijskoe knižnoe izdateljstvo.

1961 Sintaksis složnogo predloženiya. Pod red. I. S. Galkin i dr., Joškar-Ola: Marijskoe knižnoe izdateljstvo.

STIPA, Günter

1960 *Funktion der Nominalformen des Verbs in den permischen Sprachen*. MSFOu 121, Helsinki: SUS.

TAULI, Valter

1966 *Structural Tendencies in Uralic Languages*. Uralic and Altaic Series 17. Bloomington: Indiana University.

VASIKOVA, Lidija

1981 K voprosu o razvitij složnyh predloženiij v sovremennom marijskom literaturnom jazyke. *Congressus Internationalis Quintus Fenno-Ugristarum, Pars VI*, Turku, pp. 476-481.

VENNEMANN Genannt Nierfelt, Theo

1973 Explanation in Syntax. In John P. Kimball (ed.), *Syntax and Semantics*. 2: 1-50. Tokyo: Taishukan.

WICHMANN, Yrjö

1901 Wotjakische Sprachproben II: Sprichwörter, Rätsel, Märchen, Sagen und Erzählungen. *Journal de la Société Finno-Ougrienne* 19: 1-200.

1954 *Wotjakische Chrestomathie mit Glossar*. Zweite, ergänzte Auflage, Helsinki: SUS.

WIEDEMANN, F. J.

1851 *Grammatik der wotjakischen Sprache nebst einen kleinen wotjakisch-deutschen und deutsche-wotjalischen Wörterbuch*. Reval.

1884 *Grammatik der syrjänische Sprache*. Petersburg.